1月1日　月曜日

今年は日本晴。
　ほのぼのと初陽の道を歸り来て
　　青門松の前で別れぬ
去年は元旦に春雨の句が出来た。
今年は出来そうで出来ない。
寝坊して晝頃よりお化粧して家え行く。

晝頃より炬燵にて編物始める。
のどかな三ヶ日、追羽根の音一つ聞えぬ。

三日は一時頃迄かゝって出来上る。
明日の家え行くのが楽しい。

1月4日 木曜日

昔を思い出す、新大橋、
清澄庭園、

1月14日　日曜日

立花さんと銀座の松坂屋の歌舞伎展らん会を見に行く。又ゆっくり来るとしよう。
北風の吹く賑やかな街を歩いてデパートをみる。
石けん、沼・岩さんの賜物を求める。
暗くなって「裏街」を松坂シネマにて・・・・
頬に傳はる熱いしづく、
死ぬ事が美しくみえる、どうして死ななければ美しくならないのだろう。
生きて大團圓とならずに死ぬ方が何倍か美しく人の心をひきつける。美しい恋とはその抱懐で死ぬ　ことであるとか。

深夜、二病でゲブルト（＊分娩）、ママの声聞ゆ。

1000
1000 ー（500
500）
1. ソックス一足　2. 銘、羽、　1. みかん、国際、
1. 靴の中敷　2. シーツ、服ブラシ　〃芝居一本も、映画
1. 靴の修繕　3. 低いそばがらの枕　〃古垣さん、
シャツ、パンツ、2. ストッキング　2. 歌舞伎座
2. 帯・・靴　3. スラックス　3. 毛糸　2. コルセット

深夜、退けて、今日は何をする予定であったか忘れて了う。何だか妙に家へ行きたいような気がする。
今日行くつもりではなかったのに。
電話をかけると母が出た。
十五日正月なのに誰も来ない・・・なんて、昔の加藤電機の面影はないのか。
只、私の来るのを待ってゐる、父、母。
私の心は急いだ。何だか悲しい。
みかんの一箱も買って行って親子で食べようか。
停留場で水野さんと多田さんに会う。上野の松坂屋へ行くという。
月曜定休だから日本橋の白木屋え行こうと、三人で都電に乗る。
彼女達仲々面白い。盛装した人、日本髪もちら、ほら見る。
白木屋のウインドで歌舞伎座を見る。
大したものは賣り出してない。
グルグル廻って結局地下で、水野さんが水飴、多田さんがチョコレート、私が母に大きなみかんを買って雑踏の街に出る。
丁度来た都電に飛乗る。もう夕方になる。
母は何かお勝手をして居た。
レンタンに小豆の鍋をかけて、三人で炬燵に入る。
昔話に最近の話、兄の事、私の事。
淋しさのただよう和やかさ。
チャメは昨夜死んだんだって。・・・・
灯の消えたようだ。
妹の居ない此の家は猫の子一匹居なくなってさえしみじみと感じられる淋しさ。
保ちゃんと四人で夕飯。小豆はまだ中々煮えない。母が兄の事を心配する。
色々考えると面倒臭い。此の父と母に、嫁のようになって一生仕えようか。いやそうも行くまい。
私は矢張り他家え嫁いだ方が親子の為に幸福なのだろうか。でも此の父、母を残して、何だか口惜しい。姑の居ない家ならよいのに。
此の思いは家を出て病院に歸る迄頭の中にあった。
深夜（＊深夜勤）は――――ツライネ。

1月17日　水曜日

眠くて眠くてレスタミンを打って伊藤さん床に寝て了う。
今日は曇りで沼館さんと二人で銀座の松坂屋は行けなかった。
夜は酒井さんを入れてあげる。
伊藤さんが立花さんのところえ入って、面白い。
夜ともなれば賑やかなり。
又伊藤さんと岩渕さんが始まった。
今日も又仲裁役かな。
後藤さんに居て貰って入浴。心地よし。

1月17日　木曜日

退けて来てレスタミンの効果は、田舎から歸ったばかりの田宮さんの抜け出たふとんに私を夜迄寝させて了った。銀座松坂屋など思いもよらーず、晝頃、山口さん何かあったらしく気が立って居た。

夜おそくなるので寒くないように支度してハリキッて一人で出掛ける。
案外易く入れた。日向ぼっこのように並んで待ってるのどかさ。ふと動乱の朝鮮を思う。
自由席も悪くない。
殆ど良いなーと思ったが、惜しいかな土蜘蛛と陣屋はずい分居眠りして恥かしかったり残念だったり。周囲に目を向け耳を傾けると面白い。思はず微笑して了う。
終って待合室で休む。疲れたらしい。
場内は暖房で暑い位。
夜のをみてると又今度は岩渕さん伊藤さん達に見せたい。私も、も一度見たくなって了った。
三十日、三十一日の踊はあきらめなければならない。
楽屋口に並んだ数台のハイヤーに心を残し乍ら一人で夜道を歸る。
沼館さんはもう寝て居た。田宮さん外来当直今夜は十一時過迄、三人におぼろかご（＊阪東妻三郎主演映画）の話をする。話して居乍ら無性に楽しい。

1月18日　金曜日

退けて沼館さんと炬燵で昨日見て来た国際（＊劇場）の話を聞く。眠くて仕様がない。
遂に沼館さんの床に入れて貰って午后三時迄、何も知らずにグウグウ。
岩渕さん、宮田さんがお休みで忙しそう。
長後さんがオペするとか。今夜が思いやられる。そして又ウトウト。
十時起き出て入浴、勤務、山口さん、宮園さん北さん迄居て気強い。
五病でステリそうなので（＊ステルベン＝死亡）、当直の先生、小林さん、小和田さん大へん。
二人の赤ん坊が交替で泣く。其の度に牛乳を呑ませる。
仲々可はいゝものだ。
今迄よそ目に大へんだと思い眞平だと思ってた事がやってみればそうでもない。
却ってそうする事によって赤子に愛着を感じる。藤野さんの事をフと思ったりする。

1月19日　土曜日

深夜から引續き晝迄居て了った。
立花さんの口惜しさ、悲しさ、わかる。
院長のお天気屋。
何だかバカに忙しい。午后立花さんとこで一人寝る。夜さめて、福は寝て待て、タナボタ式に立花さんの酒井さんの御馳走。伊藤さんに明日は雨だとだまされる。
今夜は長後さん大分いゝので安心、宮園さんも泊ったし。
看護日誌をつける。

1月23日　火曜日

午后、観劇。晝頃よりお弁当を作りかけて伊藤さんと岩渕さんに頼んで一人先行く。
風の吹く日、うす寒い。それでも晴れた日に明治座の切符賣場に列を作っている人々、前や后の人達の話を聞いてゐると面白い。
いよいよ晝の部の終り近くなって、毎度の事乍ら、二人の来るのがおそいので、心配し、いらいらする。角迄行って此方へ来る人を、あれがそうかしら、それがそうかしらと不安な気持で凝視する。
伊藤さんの半コートと岩渕さんの手提の見えた時の喜び。急いで元の場所え。
ぞろぞろ終って出て来る人の中に田宮さんと藤田さんの姿は見えず、落着きなく並んでゐたら二人が来た。もうおそかりしである。死物狂いで階段を駆け上がる人の群。
やっとの思いで中に入り逸早く、経験があるので眞中を見る、空いてる。
やっと二人を探し出して席に着いた時の何とも云えない気持。我乍ら素早いのに感心する。
みている途中も隣席の、学生の連れて来た女の子がとても愉快だ。
伊藤さんの質問にも吹き出したくなる。
何度見ても之ばっかりは飽きない。役者の台詞をおぼえるので楽しい。
いつかは、上で見下ろすのでなく一階席で花道を見上げてみたいと彼女云う。同感なり。
此処に来るのは通か、本当に芝居好の者プロレタリヤばかり。若い男女も多い。併し役者は我々若い者の騒ぐのは好まぬだろう。ミーハー族の類かも知れないからだ。
ハネて溜息をつき乍ら外に出る。
楽屋口の所に人がむれてゐるので好奇心で立止る。三人で、前に進み乍ら、減ちゃん豊さん、荒川さん、及びその迎えの人々、ハイヤーを見る。案外平凡なのに気安さを感じた。
成田屋（＊十一代市川團十郎、海老さま）の淋しそうな歸り姿、
一人で喜んで了う。悲しくも哀れむべき自分の心。
岩渕嬢の提案で日本橋迄歩く事にする。見たまゝを色々に話しつゝ幾らか冷たい人形町の夜の街をポケットに手を入れて足早に歩く。
三越のネオンが見え、直ぐ目の前に電車の走るのをみて案外早く日本橋について了ったのを喜ぶ。今度はこうしようと話す。
併し来月の興行はあまり魅力を感ぜず、見たしともあまり思はず。だけどきっと私は又一人でこっそり、我慢しきれなくなって見に来て了うだろうと思う。電車の中で少し眠る。
消灯間近に歸院。
お弁当のお稲荷さんは伊藤さんにしてはよく出来た。
何だかとても胸の暖まる心地して寝に就く。

給料日。思ったより貰えたので安心した。
食費を拂って税金は後廻し。
剛さんより手紙届く。
きっと又今度も私は返事をいつ迄も書かないだろう。
向うでは勉強に忙しいのだろうと思ってるだろうに。私は毎日退けて来ると炬燵に入って教科書を開こうともしない。居眠りと無駄話とつまらない本読みに浪費して了う日々の時間。
いつも乍ら自分の意志薄弱を歎く。おろかしいとは思いつゝ。

オフの時間の左田さんと替って貰って、二十八日迄の、銀座松坂屋の歌舞展らん会、一人で又行く。此の間見られなかった三津五郎の喜撰（映画）が見たさに。
十二時過行ってみると虫が知らせた通りに、映画は連獅子で、それも十一時と二時と四時の三回で、時間がなくて見られない。ゆっくりもう一度見物し、スピーカーの、レコードであろう、もう皆故人となった名優達の名舞台を聞く。
台詞の云い方も思ったよりのんびりした調子で云ってゐる。源氏店、月もおぼろに白魚の、かゞりもかすむ春の宵。ゆすりの場を聞いて、間を飛ばしてすぐ次に移って了う。
つい昨日聞いたような台詞だと思はれる修禅寺物語。
七年も前の学生の頃の楽しさをかすかに思い出し、眞宗さんの桂、かつら、村田さんの美しい妹、島崎さんのその夫、大塚さんの頼朝、〇〇さんの夜叉王よ・・・
あの劇の素晴しかった事を今しみじみと思う。スピーカーの下に足を止めてじっと耳傾けて居たら、丁度頼朝がかつらを連れて歸る所あたり・・・で
視線を感じ、何だか春日さんの様だなーと、去年か一昨年逢った、まだ女学生気分の抜けない喘息だと云う彼女のいくらか青ざめた顔を思い出し乍ら振り返ったら、あ、矢っ張りそうだ、後向きだけど紛れもない彼女だ、そして横顔を見せて何やか笑い乍ら春日さんらしい人の耳打を聞いて此方をチラッチラッと見ているのはそうだ、三つ編にしてゐた一寸おませの感じの、名はたしか小山さんとか云ったあの人だ。
何だかこんな変なかっこうで、陰性な二人の様子に心持悪くなってつと向側に行って了った。
そこで又終り迄聞いて硝子戸の中の衣裳を見乍ら元の辺に歩いて来てそれとなくあたりを見廻したがもう二人の影はない。
私の持って居た歌舞伎玉手箱の松坂屋の包み紙がさぞおかしく映ったであろうと想像し乍らゆっくり階段を降りる。映画を見ないので時間はゆっくり。
何回か来て見なれた有楽町の驛、今日程つまらなく淋しく歸った時はない。結局又損をして了ったような気持。
二時半に着いて食事して三時頃出勤すると立花さんが小山さんを輸送車で手術室に出す処だ。急いで着く。
タコ（＊輸液ルートのタコ管）で輸血したりリンゲルやったりする。
奈良医長、生亀、大槻、相原先生、麻酔は後藤先生、院長先生も見てる。一寸仰々しい。
酒井さんも手傳う。
家の人達の心配そうな顔。次々と家の人から血液を取る、后藤先生が。
吉田さんと広瀬さん退けてタイムレコーダーを何やら楽しそうに話し乍らおしてる。夜、終って、輸血協会の人から採血。（坊やにタイプのよく似てゐるいやな若いやつ）
リンゲル、準夜の高野さんまでまで。
付添の人に手傳って貰ってよーく揉み、七時か八時頃退ける。
明日は十一時から 寝坊出来る。併し此の十時から三時迄の間に外出したかったのに生憎のタイムスリップで残念。

三時半退けて又炬燵。
立花さんもうすっかり歸省の準備整ってそはそは落着きない。
私に、洗濯物、食費を拂うように頼む。
婦長さんの処え行ったり、服着たり、押入れ開けたり閉めたり。
私と伊藤さんの見送りをいやに恐縮しちゃってるようで些かこっけいである。
七時頃約束の実行、伊藤さんと荷物をすけて上げ乍ら出発。
岩渕さんにお土産たのまれる。
東京驛八時頃着くと並んでる並んでる。
間もなく二〇時三〇分の列車が出る処でぞろぞろホームへの階段を上って行く、旅装の人々。
楽隊らしい荷物をしょったり下げたりしてる人、大きなトランク、ボストンバック、旅行に馴れたような人、男が多い。
金五円也の椅子を立花嬢三つ求めて楽なり。伊藤さんが幾らか眠そうだ。フラフラ歩いて、入場券と、週刊朝日?を買って来る。
芝翫丈の對談が載ってゐたからだ。
早速讀む、正月興行、歌舞伎座の籠釣瓶、八つ橋 云々がある。
忽ち讀んで了って幾らか惜しい気もしたがもう讀む処はさしてなさそうだ。
長旅の、幾らかの退屈しのぎにもと立花さんに渡す。彼女リーダーズダイヂェストだの色々と束を取り出して伊藤さんを飽きさせない様にする。
漸く我々の切符を切り出した。
私がトランク下げて階段を駆け上る。
ホームに一列に並んで電光ニュースを字を、一つ一つ口に出して讀み乍ら待ってゐる。
星のある空、有楽町の方角の空がネオンで明るい。
暫く待ってやっと広島行、の前の車輌 宇野行に乗り込む。伊藤さんは窓の所に立ってるが私は中に入って立花さんの隣え腰を下ろす。みかん一金三十円也の網袋入りを買って三人で食べる。
残りは彼女に。ともすればセンチになりそうな彼女、元気づけるように私の
欠点の数々、走り出す迄三人共笑い通し也。
発車合図のベル。残念乍ら車から降りて走り出すのを馳け出して追っかける。見送りに来た人達の別れを惜む様子、若い人が多い。
去年の七月終りの上野驛での事を思い出す。今と全然反對の場面。
あ、立花さんがハンケチらしいものを手にした。首をいつ迄も窓の外に出して手を振ってゐる。段々私の足が追っ付かなくなる。
私もオーバーのポケットからガーゼのハンケチを取り出し慌てゝ振り出した。もうあまり笑えない。立花さんの車はベソをかきそうな顔がみるみる小さくなる。見えなくなる迄、向うも此方も手を振って居た。
とうとう夜霧にまぎれて見えなくなった。気が付くと後から、「加藤さーん」と一寸笑ってるような声の伊藤さんに気が付く。小走りに後を追って来た。
「やだわー加藤さん、馳け出してー」
「何だか見送りっていやねー、悲しくなっちゃって」と私、センチになりそうだが、そうでもない。
二人でふるえ乍ら上中里から歩く。
岩渕さんのお土産どうする?と彼女聞くので可笑しくなった。

歸って岩渕さんにかねて用意のキャラメルを上げる。
朝張り切って勤務、后藤さんと二人。
巻換え（*包帯?）はヒンちゃん。
生亀先生出勤、小山氏輸血。
退けてホッとする。
夜になって、立花さんはもう家でくつろいでる時分だろう。

1月30日　火曜日

院長廻診。立花さん居ないし、佐々木さんは張り切ってゐるが二年生講義で人手不足で忙しい。酒井婦長さん手傳って呉れたが、中山さんがショックに入り過ぎて醒めなくなって了った。
ロヂノン リンゲル、果ては導尿の用意迄する始末。午后退ける迄心配、后藤さんが居てくれるから安心だけど、歯科の小宮先生やおやじが来て、生亀先生だの看護婦で、引き継ぎの時の賑やかな事。かしましい。
酒井婦長さんに好い加減にたしなめられて了う。そうも皆笑い上戸で、又私が一寸何か云うと笑い出して止まらない。
立花さんが居ないとどことなくのんびりして了う。併し張り合いもあるが。

電話があった。矢張り心配してたんだわ